

現代京都研究をめざして

谷 口 浩 司

1 はじめに

本研究は、佛教大学総合研究所第3部門において計画された共同研究である。第3部門は社会系の研究とされ、平成5年度に部門最初の研究班が3ヶ年計画で発足することになった。

現代京都の歴史的、構造的特質を都市社会の仕組みにおいて解明することを課題として、共同研究テーマを「成熟都市の条件—京都のくらしとまち—」とした。この課題を達成するために、本学社会学部、教育学部を中心に学内外より参加を求めて研究班が編成された。研究スタッフは谷口浩司（社会学部教授）を主任に、桑原公徳（文学部教授）、田中圭治郎（教育学部教授）、吉野正治（社会学部教授）、内藤三義（社会学部助教授）、西岡正子（教育学部助教授）、林俊光（社会学部助教授）、藤井透（研究所専任講師）、植木行宣（文学部非常勤講師）、野田浩資（滋賀県琵琶湖研究所）の10名で発足した。翌年、高木正朗（立命館大学産業社会学部教授）、峯野芳郎（京都市企画調整局）の2名が加わった。当初、白須正（京都市企画調整局）が京都市より参加する予定であったが、移動により交替した。ただ初年度後半より白須氏の参加を願った経緯があり、条件の許すかぎり白須氏に継続して参加していただくことになった。

さらに研究班は、教育学と社会学の領域においてサブグループを形成して実地調査を進めることにした。そのため研究協力者として今西康裕、成田敬、金田敬稔、関谷龍子、脇田健一、牧野厚史の各氏に参加を願った。

2 現代京都研究について

都市の階層性

都市は、現代国家における社会生活上の基本的な集合体であり、国家に対する自治の基礎単位である。現代都市研究では近年、各分野から多くの成果を生み出したが社会学においても例外ではない。しかしそこでは都市を一つの社会的単位とした独自の性格に関心が向けられる傾向にあった。ところで都市は現代国家の中で独立して存在しているわけではない。国家の中での位置、他の都市との関係のあり方というように階層構造を形成しており、その相互関係の中で存在している。社会的単位としての都市を解明していくうえで、都市のこの側面を見落としてはならない。

現代都市の構造的特質は、この階層構造にある。例えば京都は京都市として、国や近畿、さらには府などとの関係において存在する。この関係はこんにち、東京一極集中といわれる首都東京を軸とするハイアラーキーにおいて深まっている。このような階層構造は国家による都市支配の基本的枠組みであるが、都市が単なる行政機構として存在しているわけではない。都市には、独自の社会的統合性とその統合に基礎を置いた自治が存在している。

平安京造営より1200年、歴史的時間と場所的空間の交差において、現代京都はいかなる都市として存在し続けたのか。天皇の住居のある場所が首都とされるなら明治維新まで京都は首都であった。しかし幕府が江戸東京に置かれた時点で国における政治都市としての機能はそちらに移った。だから国の政治が行われる場所ということからすれば首都は江戸東京になる。ここにおいて、京都がもっていた都市機能は大きく変わらざるをえない。国レベルでのシステムの変動である。この変動過程においてサブシステムである近代京都はいかなる機能修正を迫られようとしたのであろうか。

「みやこ性」の社会システム

サブシステムとして規定されながら都市はなお、相対的に自立したシステムとして機能する。現代京都がかつて付与された「みやこ」としての機能を喪失しながら、「みやこ性」を保持していくことの中で、都市システムを維持しようとした。これが明治維新以降こんにちに至るまでの京都の都市としての姿であろう。この「みやこ性」とは、公家の暮らしに連なる最高の生活財を生産した京都を「売り」にすることであり、端正と洗練の京都ブランドとしてあらゆる生活財に京を冠したものづくりを、都市システムによって機能させたのである。けれども、戦後バブルに行き着いた日本の経済

は京都を揺さぶった。

都心地区に職住一体の伝統的な製造業を残してきた京都は、伝統産業が昭和50年代の半ばから急速に下降線をたどる中で、町並みの変化を余儀なくされた。バブルは、こうした変化に拍車をかけた。経済課題がそのまま景観課題になってしまうところに京都の都市システムの完成度とそれゆえの厳格さがある。職と住の一体となった歴史的都心が職の解体によって住の解体をもたられ、寺社の風景とともに京都の歴史的町並みを形成してきた町家の町並みが揺らぐ。都市社会システムの革新はどのような過程をたどるか。

「一周遅れ」の京都

他方で成熟期に入ったとされる日本経済がある。伝統的な社会組織や生活様式を解体に追いやった自動車や家電製品などが成熟産業となった現実がある。私たちの生活様式を変えた耐久消費財はすでに行きわたり、これまでのような消費は望めない。成長から成熟へ、経済は転換期を迎えている。経済の成熟に社会はどのように向き合うのか。

伝統と擦れあって不協和音を激しくたてた近代、その近代への反省がはじまっている。「近代とは何か」。「一周遅れ」で京都は先頭走者になりうるのか。

なお、本紀要に掲載した研究成果をもとに、最終のまとめを1年後に行う予定である。